

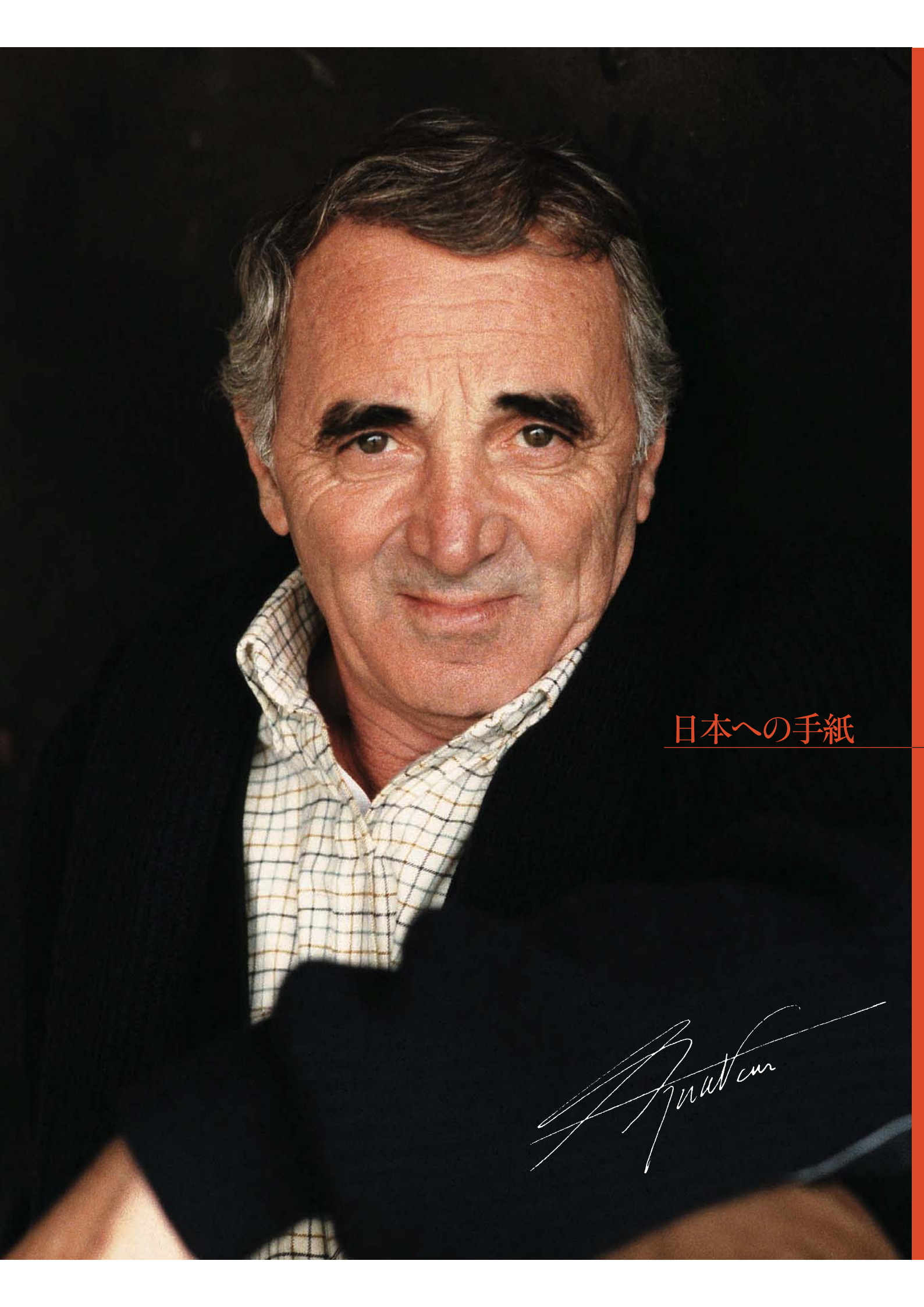
En accord avec Lévon SAYAN

Charles Aznavour

Tournée des Adieux

シャルル・アズナブール

—— ラ・ボエーム最終章 ——



日本への手紙

Amman

およそ 40 年前のことだ。
ああ、信じられない！ 40 年もたってしまったなんて！
ともかくも、中東ツアーの途中で
ふと思い立って、東京に行ってみようと思った。
実は、結構な大決心だった。
遠い国からの呼びかけに応えるのは好きだったけれど、
シャンゼリゼからカルチェ・ラタンまで
メトロに乗るのは訳が치가う。
だって、9 時間や 10 時間も飛行機に乗らなくてはならないのだから！
でも、諺だって言ってるじゃないか
「勇気を持ってば何だって可能だ」って。
それからもう一つ似たような諺がある
「不可能なことはフランス的ではない」
こうした諺に背中を押されるように
僕はエア・チケットを買った。
これが日本の地に足を踏み入れる第一歩だった。
胸をわくわくさせながら飛行機のシートに腰を下ろした。
日本の神秘的な文化は
いつだって僕を魅了してやまなかった。
以前から箸を何とか操って、
大好きな日本料理を楽しんでいた。
そして素晴らしくよく写る
「メイド・イン・ジャパン」のカメラも愛用していた。
こんな風に、日本について必要最低限のことは知っているつもりだった。
ちょっとだけ香港に立ち寄って
ゴージャスなホテルで催された
友人のパタシュウのコンサートにゲスト出演をすませると、
僕は、恋人との逢瀬にかけつける青年よろしく
そそくさと日出づる国、日本を目指した。
そして、とうとう夢がかなった。
僕は日本の美しい場所を隈なく調べ上げ、
その一つ一つを訪ね歩き、
素敵なお土産を買い込み、
美味しい日本料理に舌鼓を打った。
夢のような 4 日間だった！
でも、いくらなんでも 4 日間では短すぎる。
まるで、恋人に別れを告げる男のように、
僕は後ろ髪を引かれる思いで
フランスへの帰路についた。
しかし、神は再び恋人たちに微笑みかけてくれた。
その後、僕は幸運に恵まれ、何度となく日本を訪れては
ツアーをすることになった。
あんなに日本との最後の名残を惜しんだのだけれど、
結局、度々来目することになった。
いつ来ても、日本での滞在は楽しくて、
幸せな気分になれる。
こうして僕は、日本人や日本という国、
そしてその文化や伝統を
より深く理解することができるようになった。
東京に来ると、タクシーで移動するより
地下鉄に乗りたと思う。
その方がよそ者気分が抜けて、
東京の街と親しくなれる気がする。
もうすぐ、また東京に行くんだ。
僕の記憶が正しければ、これで 10 回目だと思う。
でも、これで最後だ、日本で歌うのは。 (訳・田村恵子)

Lettre au Japon

Il y a environ quarante ans
- Mon Dieu quarante ans déjà -
Etant en tournée dans le Moyen Orient,
Je ne sais quelle guêpe m'a piqué,
J'ai décidé d'aller visiter Tokyo
Rien que ça.
Je n'ai jamais su résister à l'appel du lointain,
Ce n'était pas comme prendre le métro
Aux Champs-Élysées pour aller au Quartier Latin,
Mais un voyage de neuf ou dix heures tout de même !
Comme on dit : A cœur vaillant rien d'impossible,
Et le second proverbe ajouté à celui-là :
Impossible n'est pas Français.
Riche de ces proverbes
J'achetai mon billet.
Ce qui me semblait être le premier pas
Sur le sol, bien que volant, du Japon
Et cœur battant je m'envolais.
Je dois avouer que la culture Japonaise
Et ses mystères m'avaient toujours attiré.
Je savais déjà, plus ou moins bien,
Me servir de baguettes et j'affectionnais
Ce que je connaissais de la cuisine du pays.
Je possédais aussi un excellent appareil de photos
« Made in Japan »,
Et quelques notions sur le pays,
Ce qui me semblait indispensable.
Après une brève escale à Hong Kong
Où j'assistais au tour de chant de mon amie
Patachou, dans un hôtel de première classe,
Je suis parti comme un amoureux part
A la rencontre de sa belle
Pour le pays du soleil levant.
Et le rêve s'est accompli :
J'ai tout exploré, tout visité,
Tout acheté, tout ingurgité,
Enfin tout ce que j'ai pu en quatre jours...
Quatre jours c'est peu !
Comme un amoureux éconduit il m'a fallu
Prendre à regret le chemin du retour.
Mais Dieu merci, il existe un Dieu pour les amoureux
Puisque assez rapidement il y eut une demande,
puis deux, et puis plusieurs pour aller chanter
Là, justement, où je m'étais promis de revenir.
J'y suis revenu souvent
Avec la même joie,
Le même bonheur.
J'ai pu ainsi apprendre plus sur le peuple japonais,
Sur le Japon, sa culture et ses traditions.
Je m'y suis surpris à vouloir prendre le métro
Plutôt qu'un taxi pour visiter la ville de Tokyo,
Afin de me sentir moins un touriste et plus un ami.
J'y reviendrai bientôt, ce sera je crois mon dixième voyage,
Pour ma Dernière Tournée au Japon.

来日メンバー

Monsieur Aznavour est accompagné de:

音楽監督

ジェラルール・ダゲール *Gérard DAGUERRE*

ミュージシャン

ベース

トニー・ボンフィス *Tony BONFILS*

ドラムス

ディディエ・ガッツォ *Didier GUAZZO*

コーラス

カティア・アズナブール *Katia AZNAVOUR* クロード・ロンバルド *Claude LOMBARD*

キーボード

エリック・ウィルムス *Eric WILMS*

ギター

ジャン＝ジャック・クラミエ *Jean-Jacques CRAMIER* ジェラルール・ニオベ *Gérard NIOBEY*

ピアノ

フィリップ・ペラトネ *Philippe PERATHONER*

サクソ

クリストフ・ネグル *Christophe NEGRE*



Charles

Hovir
1964

曲目リスト

Monsieur Aznavour choisira et interprètera parmi les chansons suivantes
以下の曲目から選ばれます。

失われる心

À ma fille ('64)

僕のやり方で

À ma manière ('94)

愛すること

Aimer ('93)

愛のあとで

Après l'amour ('56)

私の肩を抱いて

Au creux de mon épaule ('54)

アヴェ・マリア

Ave Maria ('78)

すばらしい結婚記念日

Bon anniversaire ('63)

過ぎ行く青春

Ça passe ('80)

バラのように

Comme des roses ('71)

人々の言うように

Comme ils disent ('73)

僕の魂の炎のなかで

Dans le feu de mon âme ('03)

きみの腕のなかで

Dans tes bras ('00)

これからは

Désormais ('68)

言葉(ことば)

Des mots ('03)

愛してると言って

Dis-moi que tu m'aimes ('97)

君が青春を

Donne tes 16 ans ('68)

キスしておくれ

Embrasse-moi ('86)

世界の果てに

Emmenez-moi ('68)

街角の瞳

Et moi dans mon coin ('66)

想い出の瞳

Et pourtant ('63)

生きる喜び

Être ('80)

フォー・ミー、フォルミダブル

For me, formidable ('63)

帰り来ぬ青春

Hier encore ('64)

それがわかれば

Il faut savoir ('62)

列車がある

Il y a des trains ('03)

忘れられない人

Inoubliable ('94)

五月のパリが好き

J'aime Paris au mois de mai ('51)

だから君を愛している

J'en déduis que je t'aime ('59)

希望に満ちて

Je m'voyais déjà ('60)

君にすがって

Je me raccroche à toi ('86)

何も聞こえない

Je n'entends rien ('03)

さよならはしない

Je ne ferai pas mes adieux ('87)

ジュ・テーム - a.i.m.e

Je t'aime - a.i.m.e ('94)

僕は旅する

Je voyage ('03)

レギュイユ

L'aiguille ('87)

恋は一日のように

L'amour c'est comme un jour ('62)

ラ・ボエーム

La bohème ('65)

批評

La critique ('03)

ラ・マンマ

La Mamma ('63)

ひなぎく

La marguerite ('92)

地球は死んでゆく

La terre meurt ('06)

イディッシュ・マンマ

La yiddische mamma ('97)

大根役者

Le cabotin ('68)

女性の権利

Le droit des femmes ('97)

破れた帽子

Le feutre taupé ('46)

二人の時

Les bons moments ('67)

コメディアン

Les comédiens ('62)

子供たち

Les enfants ('97)

二つのギター

Les deux guitares ('60)

移民たち

Les émigrants ('86)

人生のイメージ

Les images de la vie ('97)

昔気質の恋

Les plaisirs démodés ('72)

リスボン

Lisboa ('03)

きみへの最後の歌

Ma dernière chanson pour toi ('97)

僕はひとり

Me voilà seul ('72)

想い出をみつめて

Mes emmerdes ('76)

声のない恋

Mon émouvant amour ('80)

愛のために死す(炎の恋)

Mourir d'aimer ('71)

遠い想い出

Non, je n'ai rien oublié ('71)

いつの日かまた会いましょう

Nous nous reverrons un jour ou l'autre ('97)

僕たちには子供がいらない

Nous n'avons pas d'enfant ('71)

人生に目覚める時

On s'éveille à la vie ('03)

きみの孤児

Orphelin de toi ('03)

なぜなら

Parce que ('59)

八月のパリ

Paris au mois d'août ('65)

ポーカー

Poker ('53)

ジャム・セッションのために

Pour faire une jam ('58)

きみが僕を愛する時

Quand tu m'aimes ('00)

悲しみのヴェニス

Que c'est triste Venise ('64)

異なった人

Quelqu'un de différent ('03)

キ(誰?)

Qui ('63)

じっとこうして

Reste ('64)

青春という宝

Sa jeunesse ('56)

忘れじの面影(シー)

She ('74)

生命をかけて

Sur ma vie ('55)

悲しい別れ

Te dire adieu ('54)

僕の前にいるきみ

Toi contre moi ('86)

きみと僕

Toi et moi ('94)

すべては終わり

Tout s'en va ('68)

トルース・シュミーズ

Trousse chemise ('62)

のらくらもの

Tu t'laisses aller ('60)

生ける屍

Un mort vivant "Délit d'opinion" ('03)

砂の城

Un par un ('71)

注*カッコ内は発表年度を表しています。

Tournée des Adieux

Aznavour

帰来ぬ青春

春の若さに酔いしれて 昨日まで
時の流れに身を沈めて 夜の巷におぼれながら
いつの間にか春は過ぎて 夢も望みも空に消えて
今はすでに行く道さえ 見失ったまま僕はひとり

春の若さにはしゃぎながら わきまもなく
ただひたすら走りつづけて 世に刃向い 人を傷つけ
過去を知らず未来もなく あたりかまわず
生きてきた僕の 愚かな日々よ
意味もなく過ぎていった 二十歳の春よ

昨日まで 僕はまだ若い生命を燃やしていた
それはまるで夢のように 消えていった
そして今 うつろな瞳と額のしわに
年を刻んで 友さえなく
胸いたむ 恋の名残もなく
今は遙かな 僕の春よ
微笑みに満ちた宝よ 恋の花よ 仲間たちよ
今はどこに 今はどこに

(詞・古賀力)



Hier encore

Hier encore j'avais vingt ans

Je caressais le temps

Et jouais de la vie

Comme on joue de l'amour

Et je vivais la nuit

Sans compter sur mes jours

Qui fuyaient dans le temps

J'ai fait tant de projets qui sont restés en l'air

J'ai fondé tant d'espoirs qui se sont envolés

Que je reste perdu ne sachant où aller

Les yeux cherchant le ciel,

Mais le cœur mis en terre

Hier encore j'avais vingt ans

Je gaspillais le temps

En croyant l'arrêter

Et pour le retenir même le devancer

Je n'ai fait que courir

Et me suis essoufflé

Ignorant le passé conjuguant au futur

Je précédais de moi, toutes conversations

Et donnais mon avis que je voulais le bon

Pour critiquer le monde avec désinvolture

Hier encore j'avais vingt ans

Mais j'ai perdu mon temps

À faire des folies

Qui ne me laissent au fond

Rien de vraiment précis

Que quelques rides au front

Et la peur de l'ennui

Car mes amours sont mortes avant que d'exister

Mes amis sont partis et ne reviendront pas

Par ma faute j'ai fait le vide autour de moi

Et j'ai gâché ma vie et mes jeunes années

Du meilleur et du pire

En jetant le meilleur

J'ai figé mes sourires

Et j'ai glacé mes pleurs

Où sont-ils à présent

À présent mes vingt ans?







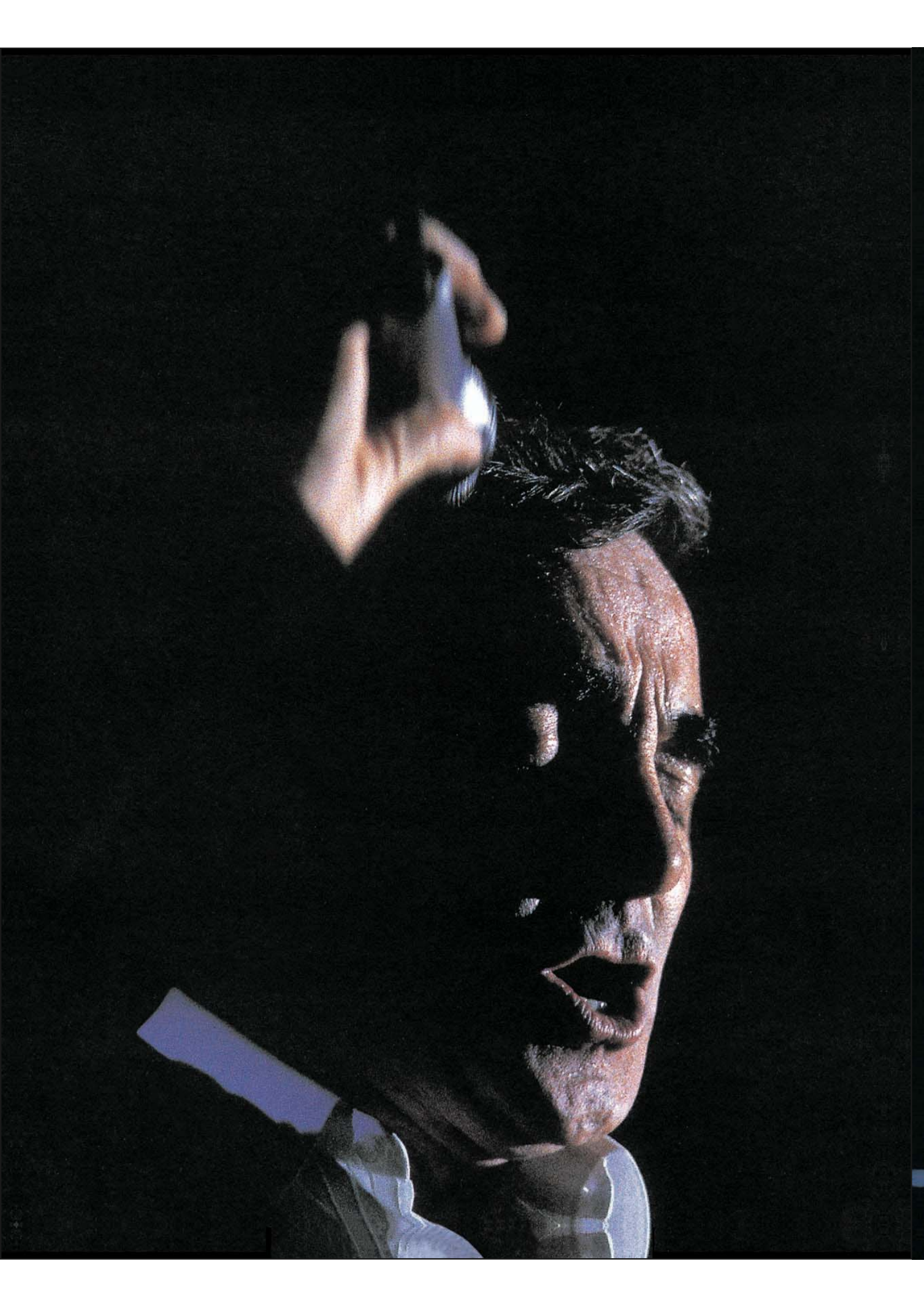


若かった僕たち二人は
あの頃、愛し合っていて
気ままにその日暮らしをしていたね
そうだ、いま思い出しても
この奇妙な世の中で
僕たち二人はいつも一生懸命だった

Quand je pense parfois
à nous, à nos je t'aime
à l'époque où sans loi
vivait notre bohème
je me dis que ma foi
dans ce monde un peu fou
nous pouvons toi et moi
être très fiers de nous.











演奏予定
曲目解説
Notes de programme

執筆:古賀力(K)、芳賀詔八郎(H)、大野修平(O)

失われる心

À ma fille

もうすぐ嫁いでゆく娘を持った父親の悲しみが歌われる。「いつかその日が来るのはわかっている。人生の運命なのだから。私がおそれているその日、お前が私達から去ってゆく日。お前の選んだ男に渡すために、小さな教会に導いてゆくその日、昼も夜のように、夏も冬のように寒い気がするだろう。私達の幸福を奪いに来る見知らぬ男が憎いが、私はそうしよう。お前を何よりも愛しているのだから」。アズナブル作詞・作曲。1964年(K)

愛のあとで

Après l'amour

それまで、ベッドのなかでの秘め事を歌にするなど許されていなかった。が、このシャンソンでアズナブルは作詞家として果敢にタブーを破った。ここに歌われるのはずばり官能的な愛。が、猥褻な響きはない。真に愛し合うことの素晴らしさを知っている人の胸にはしっかりと届くはずだ。アズナブル作詞・作曲。1956年(O)

アヴェ・マリア

Ave Maria

アルメニアの血を引くアズナブルは、れっきとしたキリスト教信者である。だから、彼のシャンソンには神をテーマにしたものが多い。いずれも神への真摯な思いや熱い信仰心が表明されている。グノーやシューベルトとはまた違った趣のマリア讃歌。アズナブル作詞、ジョルジュ・ガルヴァレンツ作曲。1978年(O)

すばらしい結婚記念日

Bon anniversaire

“誕生日”という邦題がついているレコードもあるが、“結婚記念日”のまちがい。その記念日に二人はサルトルかアヌイの芝居を観に行くことになっていたけれど、注文していた妻のドレスができてこない。やっと届いたところ、あわてて着たためにチャックがこわれ、縫い目まで裂けてしまった。11時にやっとなおったけれど、芝居はもうはねてしまっている。二人は黙ってゆっくり街を歩く。今夜の予定はめっちゃめちゃでも、二人は幸せだ。だって愛しあっているのだから……。アズナブール作詞・作曲。1963年(H)

人々の言うように

Comme ils disent

スイスで冬のヴァカンスを過ごしていたある日、舞台装置家アンドルーシュカがアズナブールの目の前に現れた。両腕を組み、女性的な素振りでタバコを吸っている。彼はホモセクシュアルだった。新しい歌詞を考えていたアズナブールはその姿を見て閃いた。そして、アンドルーシュカをモデルにしたこの歌ができ上がった。報われぬ同性の愛。アンドルーシュカ自身もこの歌に大いに感動したという。アズナブール作詞・作曲。1973年(O)

世界の果てに

Emmenez-moi

北国の空しか知らない“僕”は、港に入って来る船を眺めながらまだ見ぬ南の国に思いを馳せる。やがて、こらえきれずに船に向かって叫ぶ。「世界の果てに連れて行ってくれ」。これが原題になっている。アズナブール作詞・作曲。1968年。1999年、恵まれない人々に食事を無料配布するボランティア運動「心のレストラン」を支援するコンサートで、趣旨に賛同して集まったアーティストたちがオープニングでこの曲を大合唱した。もちろん、アズナブールもそこにいた。(O)

街角の瞳

Et moi dans mon coin

「あいつ、彼は君をチラリと眺め、眼で君を撫でまわす。そして、僕は片隅で終わりが来たのを歯を喰いしばって耐えている。君はほほえんで彼を許し、僕がここにいるのが邪魔そうだ。僕は片隅で涙のこぼれそうな心を抱き、自分の悲しみを呑みこんでいる。ああ、いや何でもない。きつとちょっと疲れているんだ。ウウン、何でもない。いや、いや、僕は素晴らしい夜を過ごしたよ」。アズナブール作詞・作曲。1966年(K)

思い出の瞳

Et pourtant

映画『アイドルを探せ』の中で、アズナブール自身が創唱した。「ある朝目を覚ますだろう二人の恋の果てに、そして僕は惜しげもなく旅立つだろう。君の声も体も腕も永久に忘れて。身体にしみこむ君の秘密のきずなをたち、他の人の腕の中でやがては君の名さえ忘れ、僕が未来を考えなおすことができ、君が遠い思い出となる時、僕の病いも怖れも悲しみも終わりを告げるだろう。それでも (Et pourtant)僕は君しか愛さない (Je n'aime que toi)、それでも僕は君しか愛さない」。アズナブール作詞、ガルヴァレンツ作曲。1963年(K)

生きる喜び

Être

オランピア劇場でのリサイタルで発表された。その時のライブ録音のほか、スタジオ録音盤の『夜・ファンタスティック』も残されている。哲学的な思索と言っているほど、生きてこの地上にあることを深くとらえて歌った作品。アズナブール作詞、ガルヴァレンツ作曲。1980年(O)

フォー・ミー、フォルミダブル

For me, formidable

英語と共通したスペルの単語がフランス語には多い。“formidable”もそうした単語の一つで、発音がちょっと違うだけで“ステキな”という意味は同じ。イギリス娘に恋したフランス青年が主人公なのだろうか。英語とフランス語を巧みに織り込んだ語呂合せ的な面白さが、フォービートに心地良く乗ったシャンソン。ジャック・プラント作詞、アズナブール作曲。1963年(O)

帰り来ぬ青春

Hier encore

若い日々を思いのまま、あたり構わず生きてきた男がいまは戻らぬ青春への哀惜をこめて歌う。「昨日はまだ二十歳だった」……。時の流れは速い。顔に幾筋かの皺を刻んで足早に立ち去ってしまった。いまはもう友もなく、空虚さだけが自分を取り巻いている。珠玉の一篇。アズナブール作詞・作曲。1964年(O)

それがわかれば

Il faut savoir

原題の意味は「知らなければならぬ」とか「学ばなければならぬ」。恋が終わったその時、「テーブルを離れることを知らなければならぬ

い、哀れな素振りを見せずに、音も立てず去らねばならない」。しかし、“僕”にはできない。そうするにはあまりにも君を愛し過ぎているから……。アズナブール作詞・作曲。1962年(O)

五月のパリが好き

J'aime Paris au mois de mai

パリの5月。冬が過ぎ去り、明るい陽射しとともにマロニエの花が咲き乱れる。誰もが心軽やかになる、そんな気分がジャズに歌われる。アズナブール作詞、アズナブールとピエール・ロッシュ作曲。1951年(O)

希望に満ちて

Je m'voyais déjà

「俺は18歳のとき故郷を離れ、パリに出た。チャンスをつかんでパリを征服しようと。貯金をはたいて最新流行のスーツも作った。俺はもうスターきどり。ポスターには名前が大きいのり、客は大喝采で皆総立ち、ファンのサインせめから逃げまわる……。でも、そのスーツはもう30年も着ているし、俺の歌がおかしくて笑うのはこの俺だけ。夜汽車に乗って、旅行カバンをさげてドサ回り、アパートに貧しい食事……。それは俺のせいじゃない、客に見る目がないからだ。そして俺は夢見る。拍手と歓声とライトに照らされた舞台、そして俺はスター……。過去のステージで、上着をぬいでシルエットになって消えていくラストシーンが印象的だった。アズナブール作詞・作曲。1960年(H)

ラ・ボエーム

La bohème

ボエームとは、芸術家の気ままな暮らしのこと。この歌の主人公“僕”は20歳の頃、画家になる夢を抱いてモンマルトルのアパルトマンに恋人と暮らした。2日に一度しか食べ物にありつけなくても来たるべき成功を夢見て“きみ”をモデルに絵を描き続けた日々。が、成功はやって来なかった。日々は去り、時は移り、“きみ”もういない。ある日、ふと昔のアトリエを訪ねるが……。アズナブール作曲によるオペレッタ『ムッシュ・カルナヴァル』のなかの一曲。主役のジョルジュ・ゲタリーが歌い、大ヒットとなる。ジャック・プラント作詞。1965年(O)

ラ・マンマ

La Mamma

耳と心に響く悲痛なテンポとメロディー。ただならぬ雰囲気冒頭から暗示される。家族の誰からも愛されていたマンマがいま、死出の旅路につこうとしているのだ。マンマをこずらせた息子までも駆けつけている。それぞれの胸に

去来するマンマの笑顔、涙、かけがえない思い出の数々……。フランス・ギャルの父ロベール・ギャル作詞、アズナブール作曲。1963年(O)

二人の時

Les bons moments

原題は「素晴らしい瞬間」(複数)。若さに任せて愛し合っていた二人。財布の中身がたっぷりの時も、無一文でも、燃えるような愛を抱いて生きていた。あまりに無邪気だった二人の愛に終わりの瞬間が来る。でも、こう言って別れよう。「二人は素晴らしい瞬間の数々を生きたのだ」。アズナブール作詞・作曲。1967年(O)

コメディアン

Les comédiens

旅芸人の一座の呼び込みの口上のように威勢よく始まる。村から村、町から町へと夢を売り歩くマジシャンやミュージシャンたちが主人公。町の場末にテントを立てて、即席の小屋をかける彼らのきびきびした動きや、ステージで次々に披露される芸の数々を思わせるテンポが小気味いい。ジャック・プラント作詞、アズナブール作曲。1962年(O)

二つのギター

Les deux guitares

ロシアの伝統的な曲をアズナブールがアレンジし、歌詞を書いた。ここで彼は流浪の民ツィガーン(ジプシー)の生き方に共感を示す。人は何のために生きるのか。考えても結論は出ない。後ろを振り返らず、いまを精一杯生きるだけ。利根的と言われようと、強い酒のグラスを重ねながら、この瞬間を酔いしれるまで楽しむのだ。アズナブール作詞・編曲。1960年(O)

移民たち(みんな一緒に)

Les émigrants (Tous ensemble)

フランス社会の人種構成は複雑だ。歴史的に様々な国から亡命者たちを受け入れてきたせいもある。アズナブールの両親もアルメニアから移り住んだのだ。だから彼は言う。「私は外国に出る時はフランス人として振る舞うけれど、フランスではアルメニア人の代表として行動する」と。この歌のなかに名前の挙がっている人々もみな移民で、それぞれが明日を信じて自分の仕事に励んだ。そうした移民たちへの強い共感が歌われる。ジャック・プラントとアズナブール作詞、アズナブール作曲。1986年(O)

昔気質の恋

Les plaisirs démodés

「頬を寄せあい踊ろう」という副題が付く。速いロック調の前半とスローテンポの後半に曲調が分かれている。「さあ、おいで、二人して時代遅れのダンスだけど、頬と頬を寄せあい踊ろうよ。若い連中のようにこの気狂いじみリズムにあわせるのは無理だけど、こうして抱きあって踊ればお互いの心はとけあって、この果てしない夜の中に二人だけの世界は広がって行く。さあ、眼を閉じて、他の連中を気にしないで、こうして頬を寄せあい踊ろう」。アズナブール作詞、ガルヴァレンツ作曲。1972年(K)

思い出をみつめて

Mes emmerdes

原題はちょっと訳しにくいけれど、「わが悩み」とか「困った事柄」といったニュアンスの言葉。煩わしいものや事柄全般とも言い換えられる。いまや腹も出っ張り、それなりに功成り名遂げた身とはなったが、懐かしく思い出すのは若き日の友人、恋人、悩みや苦しみ数々、というわけ。過ぎ去った青春の日々はノスタルジーの霧の彼方、涙色に輝いて見える。アズナブール作詞・作曲。1976年(O)

声のない恋

Mon émouvant amour

“きみ”と呼びかけられている恋人は言葉がしゃべれなくて「沈黙のなかに生きている」人。そんな“きみ”を愛している“僕”はその熱い想いを伝えたくて、憶えたての手話で必死に語りかける。アズナブールがステージで実際に手話を交えて歌う、感動的な歌。アズナブール作詞・作曲。国際障害者年の1980年(O)

愛のために死す(炎の恋)

Mourir d'aimer

女性教師ガブリエル・リュシエは、教え子の高校生との恋を世間から非難されたのを苦に自殺してしまった。フランス中が涙を流したこの事件をテーマにして、アニー・ジラルド主演の映画を撮ったのはアンドレ・カイヤット監督だった。彼らの愛に思いを寄せながら作られた曲。アズナブール作詞・作曲。1971年(O)

遠い想い出

Non, je n'ai rien oublié

かつての恋人に偶然巡りあって声をかける。「思いもしなかったよ、出逢うなんて。無理に

微笑んで君を見ている僕。僕は何も忘れていない。君の身上話をし給え。何をして暮しているのか。独りでパリ住いか。僕は、何を言ったらいいかわからない。思い出の数々が頭を占領する。そして僕の過去がああ敗れた日から戻ってくる。君の父親は君にとっても期待していたので、二人の愛を引き裂いた。あれから君をあきらめるまでずいぶん時間がかかったよ……。さあ、もうカフェが閉まる時間だ。送って行こう。これからも、もし君がいやでなかったら君に会いたい。もちろん出来たらのこと。何も忘れていない僕のように、君が何も忘れていなかったら……。いかにもアズナブールの面目躍如とした恋の歌である。アズナブール作詞、ガルヴァレンツ作曲。1971年(K)

人生に目覚める時

On s'éveille à la vie

アルバム『Je voyage』(日本未発売)収録曲。ミュージカル『ロートレック』(2000年、全曲アズナブール作詞・作曲)で使われた曲を集めた、2005年のアルバム『Insolitement vôtre』(日本未発売)では、女性歌手エレヌ・セガラとデュエットしている。朝の太陽が世界を照らし出すように、愛が現れるその時、僕たちは人生に目覚める、と歌う。アズナブール作詞・作曲。2003年(O)

悲しみのヴェニス

Que c'est triste Venise

ゴンドラに揺られているかのようなテンポで歌われる悲しく美しいバラード。ゴンドラに乗っているのは熱く、激しく愛し合っている恋人たちではない。二人の恋は、沈みゆく夕日よりもさらに熱のないものに成り果ててしまっている。まるで舞台装置のように、二人を取り巻くあまりにも美しい光景。「恋が終わった時、ヴェニスはなんて悲しいのだろう」。フランソワーズ・ドラン作詞、アズナブール作曲。1964年(O)

じっとこうして

Reste

静かな歌で、アズナブールのセクシー・ヴォイスが最大限に効果を発揮している。「じっとこうして、このまま僕の体の上で、僕の腕の中にかみあって、あえいで、満ち足りて、うっとり酔って、僕のハートの上に恥らいを捨てて、肌もあらわに気を失ってじっとしておいで。髪を乱し無我夢中になってここにこうしておいで。何もいわないで、喜びの上、希望の中に、夜の中に、朝が来るまで、こうしておいで」。アズナブール作詞・作曲。1964年(K)

青春という宝

Sa jeunesse...entre ses mains

気づかぬうちに、音も立てずに過ぎ去ってしまう青春の貴重さを歌い上げている。「酔いしれるまで／青春という美酒を飲まなければならない」という一節に説得力がある。アズナブール作詞・作曲。1956年(O)

1989年にスタジオ録音し直し、ピアノ一本で歌って改めて世に問うた。

忘れじの面影

She

イギリスの連続ドラマのためにハーバート・クレットマーが作詞し、アズナブールがそれに曲をつけて歌ったのは1974年。5週間、イギリスのヒット・チャートのトップに輝いた。続いてアズナブールがフランス語歌詞を書いている。1997年の映画『ノッティンガムヒルの恋人』のテーマ曲としても親しまれた。(O)

トルース・シュミーズ

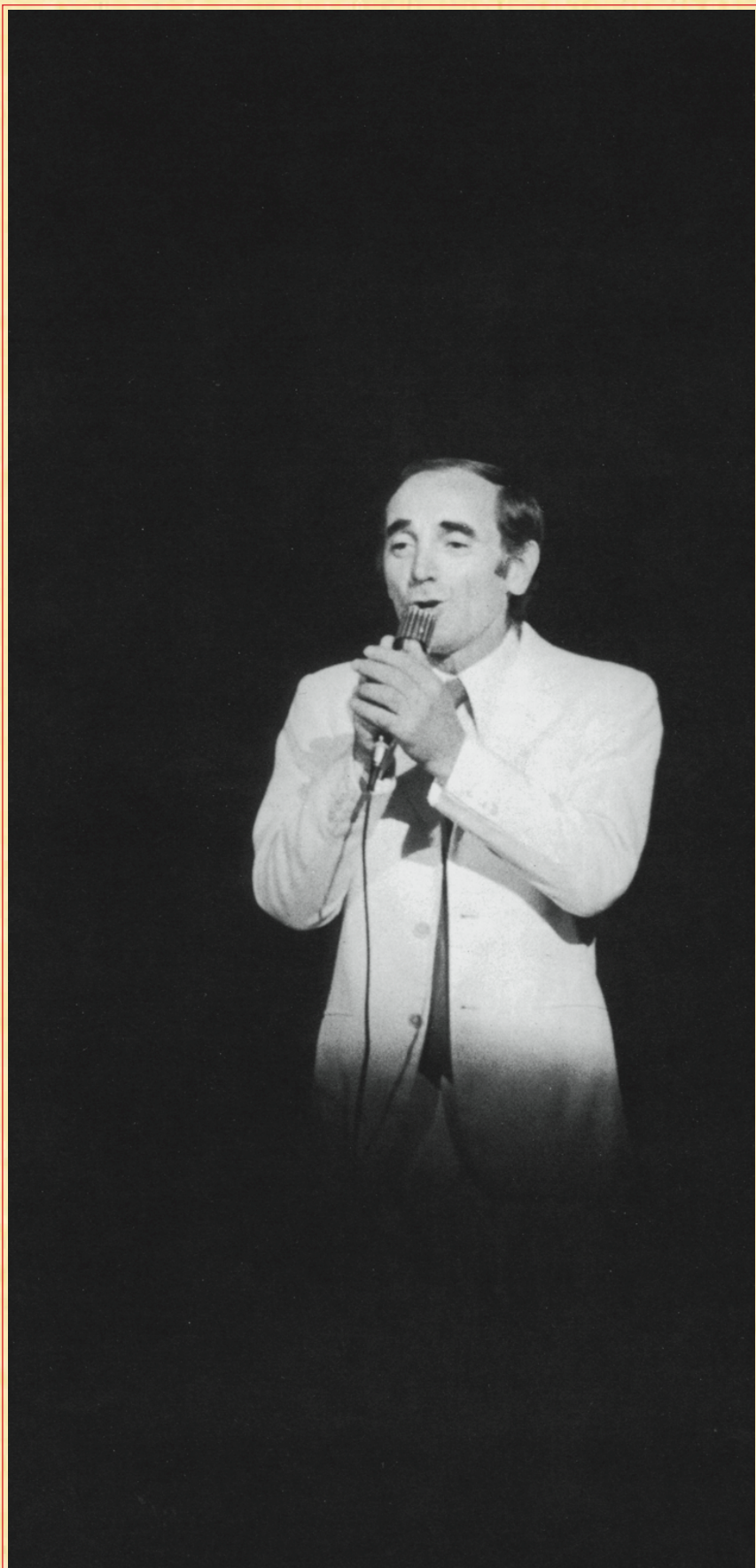
Trousse Chemise

海のすぐ近くに森のあるトルース・シュミーズへ“きみ”と行き、そこで若さ故の愚かな事をした思い出が語られる。小道具に使われているワインのミュスカデのような味わいを持ったシャンソン。「トルース・シュミーズ」には、シャツの裾をまくり上げる、といった意味がある。そこからこのシャンソンの内容が察せられると思う。ジャック・マルイユ作詞、アズナブール作曲。1962年(O)

のらくらもの

Tu t'laisses aller

原題をそのまま訳すと「お前は成行きに任せる」とか「身なりを構わない」といった意味になる。結婚5年目にして、だらしない身なりで平然としている妻に大いに愚痴をこぼすという設定。でも、この亭主、アルコールの力を借りなければ言えない気の弱いところもある。最後の方になると、妻を愛すればこそその悪態だったのかと、ほろりとさせるストーリーだ。アズナブール作詞・作曲。1960年(O)



Notes de programme



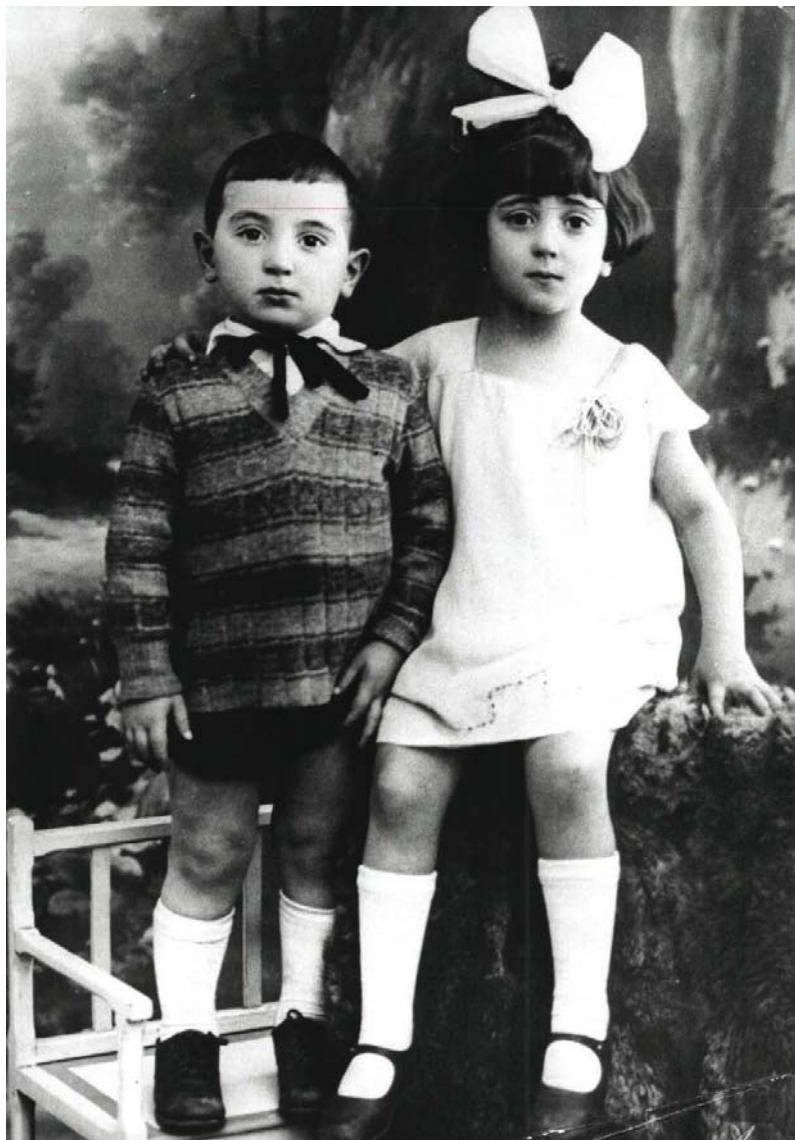
パリで誕生。1924年



芸人一家。アルメニア人の両親、姉のアイダと。



一人でピアノを弾くようになった頃。



姉のアイダと。一緒に歌い、詩を書き、楽器を演奏した。1927年
(彼女は後に『わが弟シャルル・アズナヴールの想い出』を書くことになる)



バラエティーショーのシガルーネット劇団に入り、
姉とともに各地を巡る。



演劇学校に通い、オデオン座に立つ。



注目を集め始めた頃。



両親と。第二次大戦中、一家はレジスタンスの闘士でもあった。

家族・我が人生

Famille et vie privée



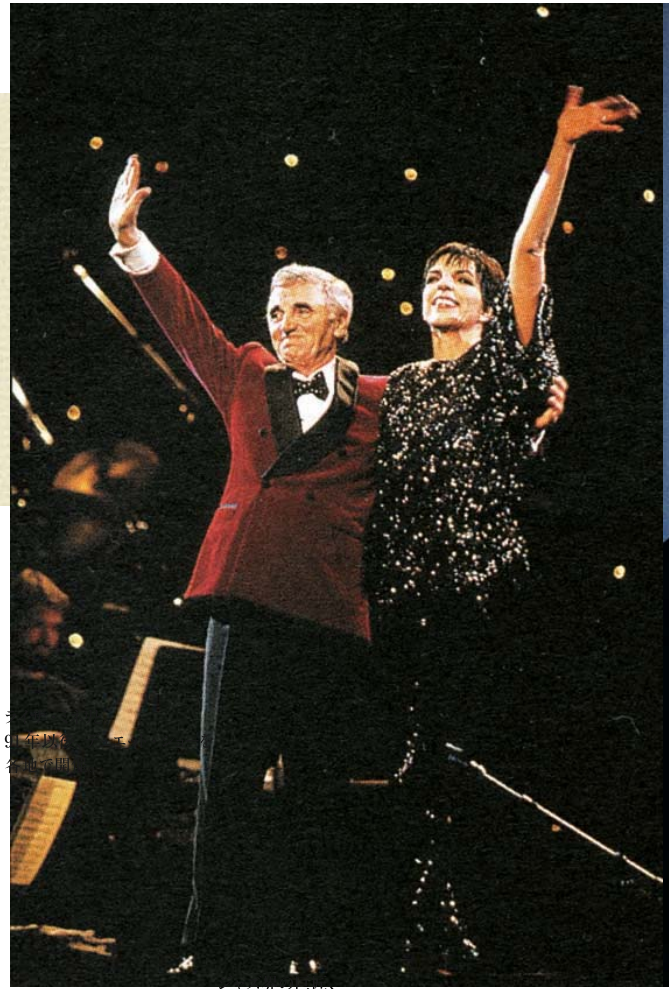
我が家族。後列・次男ニコラ、妻ウツラ、シャルル。
前列・長男ミーシャ、娘カティア、姉アイーダ、
最初の結婚で誕生した長女セダ。



忘れえぬ人々

Les inoubliables

チャーリー・チャプリンにあいさつ。
中央は喜劇役者フェルナンデル。



ハリウッドでも大活躍した
歌手・俳優の
モーリス・シュヴァリエと。



「聖なる怪物」と呼ばれた
歌手エディット・ピアフと。



ルイ・アームストロング(左)、
デューク・エリントン(右)と。

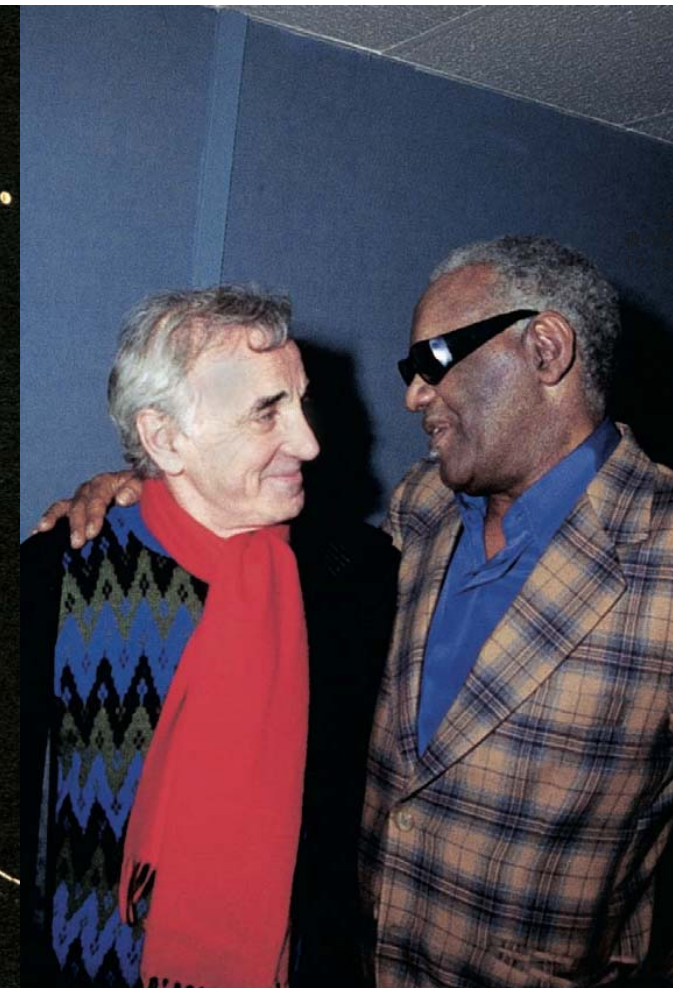
テノール歌手、指揮者の
ブラッド・ドミンゴと。



詩人・歌手の
シャルル・トレネ(中)、
詩人・画家・映画監督の
ジャン・コクトーと。



マネージャーのレヴァン・サヤンと。



チャールズと。
「シマ」はいい、と語る。



歌手の
ライザンドと。



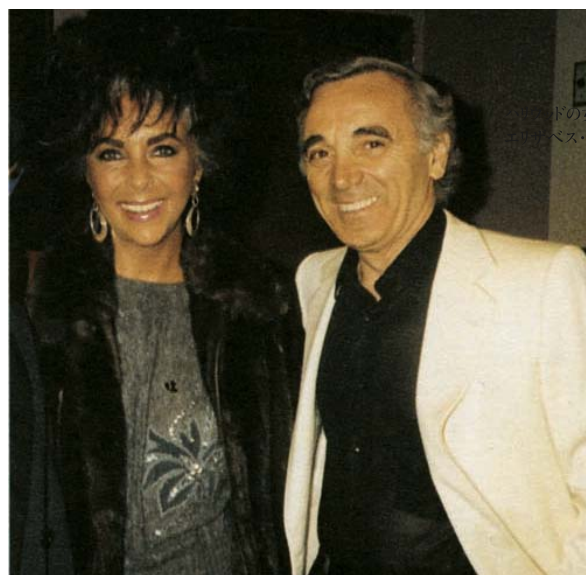
女優
リジダと。



俳優のロレンス・ムーア、
歌手のライザ・ミネリ、
サミー・デイヴィスJr.らと。



義兄で作曲家の
ジョルジュ・ガルヴァレンツ (左)、
フランク・シナトラ (中)と。



女優
ベス・ネーラーと。



88年アルメニア地震で5万人の死者が出たとき、アズナブールは同郷の映画監督アンリ・ヴェルヌイユとともに89名のアーティストを組織して、救済運動の先頭に立った。そのときに発売されたアルバム『アルメニア、汝がために』は100万枚を超えるヒットとなり、ユネスコからは「アルメニア終身大使」に任命されている。2001年には、トルコによるアルメニア人虐殺の歴史を描いた映画『アララの聖母』にも出演。シャルル・アズナブールにとって祖国への愛は、闘いの歴史を自ら生きることと言えるかもしれない。

祖国 アルメニア *Arménie, terre d'origines*





パリ版 徹子の部屋

憧れの“歌の神様”とパリでおしゃべり

Le tournage de l'émission "TETSUKO NO HEYA" à Paris :

Conversation avec "Le Dieu de la Chanson"



第8区のホテル・アテネブラザにて

黒柳 『徹子の部屋』でございます。30年近く続けてまいりましたこの番組ですけれど、初めて海外でお客様をお招きすることになりました。お招きというより、私がパリに来ているんですけれども。

今日のお客様は、フランスを代表する歌手、というより世界の歌の神様と言われているシャルル・アズナブールさんです！ よくいらしてくださいませ。Enchanté. (はじめまして)

アズナブール C'est mon plaisir.

黒柳 「会えて嬉しい」とおっしゃってくださっています。このすばらしい方に、これからお話をうかがえると思うとドキドキします。どうぞ皆さま、最後までごゆっくり。

「3分間のドラマ」・歌を演じる

黒柳 日本にはもう9回もいらっしやっているんですね。

アズナブール ええ。歌いに行くだけでなく、ただ単にちょっとうかがっているということもありますから、もっと多いですね。

黒柳 そういときは何をしに？

アズナブール 写真を撮りまくっていますね。買い物も楽しみです。新しいテクノロジーが好きなので、新製品を探して回ります。

黒柳 何かマッサージ機で、こういうふうには体が揺れるやつをお買いになったと聞いたんですけど、本当でしょうか。

アズナブール 2つ！ 2つも買いました(笑)。次に日本へ行くときにはもう2台買うつもりです。

黒柳 今82歳でいらっしやるんですけど、80歳のときのDVDを拝見しても衝撃的でしたね。どうしたらあんなに強い声でお歌いになれるのでしょうか。

アズナブール 自分でもわかりません。ステージでしか歌わないし、「ア・ア・ア・ア」などと発声練習も全くしません。でも、いつもうまくいくんですよ。私の外見や声はいたって平凡ですが、だからこそ、かえって聴衆の皆さんがグイグイ引きこまれるのでしょうか。

黒柳 「シャンソンは3分間のドラマ」と言われていますけど、本当にその人になりきって一つの歌をお歌いになる。たとえば「ラ・ボエーム」なら、若い画家がモデルと恋に落ち、別れ、その後長い年月が過ぎるまでを3分くらいの間に表現されるわけですよ。

アズナブール 私は9歳の頃に役者としてデビューしましたが、歌いたいと思ったことは全くありませんでした。私の夢は生涯かけて役者になることでしたから。しかし、成長するにつれ、自分に合った役を見つけにくくなり、

私には生活がかかっていたから、レビューの世界に入ったんです。ここでは、歌、ダンス、演劇が必修でしたから、演劇をベースに少しずつ歌の世界に入っていました。だからきつと、私の映画を見た皆さんは「歌手なのになかなかヤルね！」とおっしゃるんですよ(笑)。

黒柳 『ピアニストを撃て』('60)をはじめ、何しろ60本もの映画に出ていらっしやるので、ほとんど映画俳優と申し上げてもいいと思うんですけど。

アズナブール ええ。でも、今は役者より歌手であることのほうがずっと重要です。

黒柳 「愛の讃歌」などで有名なエディット・ピアフのためにたくさんの曲を書かれたり、一緒にツアーをなさったりしていらっしやいますが、ピアフはどういう方でしたか。

アズナブール ピアフは、悲しみや不幸を歌に込められる人でした。それが彼女の天性の才能でしょう。彼女はつねに正しいと思う行動をし、迷いがありませんでした。

黒柳 以前、『恋に生きた女ピアフ』('83)という、若い頃のピアフと恋人のマルセル・セルダンのことを描いた映画を拝見したんですけど、アズナブールさんはご本人の役で出演していらっしやいましたね。

アズナブール 私は当時、ピアフの家に住んでいました。何というか、私はピアフの仲間で、日常の彼女の話し方や歌い方を目の当たりにしていたので、ときどき彼女にピッタリの詞を書くことができたのだと思います。私は彼女の正式な作詞家ではありませんでしたが、気に入って歌ってくれました。彼女のために書いたのは7曲だけで、むしろ他の歌手のためにずいぶん作詞していますよ。

黒柳 アズナブールさんの歌を、ビング・クロスビーやフレッド・アステア、レイ・チャールズなど、たくさんのアメリカの歌手の方も歌っていらっしやいますよね。

アズナブール 私はいつも世界中の人にとって普遍的なテーマを歌っている



ので、訳しやすいと思います。いかにもパリふうのシャンソンはアメリカ人には歌いづらいでしょう。

黒柳 性を正面から歌った「愛のあとで」や、女装してショーに出ている男性の男性への恋をテーマにした「人々の言うように」など、放送禁止になったり、物議をかもしような作品もたくさんおつくりになっていらっしゃる。

アズナブール ラジオに不向きというだけで、禁止されたわけではないんですよ。ヨーロッパではわりと普通に放送されています。ただ、アメリカでは遅い時間帯にしか流されません。たぶんアメリカ人は、私たちヨーロッパ人より生真面目なのでしょう。でも、私はこれからもこうした社会の現実を書き続けます。たとえばレイプや同性愛など、他の人が考えつかないようなテーマについて。

黒柳 私も耳の聞こえないプロの俳優と一緒に、デフ・シアターという劇団を持っているんですけど、アズナブールさんは25年前に、耳の聞こえない恋人に手話で話しかける「声のない恋」という歌を作っていらっしゃいますね。

アズナブール ええ。興味深いことに、ニューヨーク公演のとき、アメリカの手話がフランスとは違うのを発見しました。最前列に耳の不自由な奥様が座っていて、その側でご主人が歌を手話で翻訳していたんです。それは美しい光景でしたね。

黒柳 日本の手話もまったく違います。私も、アメリカの聾啞者劇団の方たちと日本で公演したことがあるんですよ。

アズナブール それはとても興味深いですね！ 僕は最近、中近東や南アメリカなどで投獄されたり、暗殺されたジャーナリストたちをテーマに書きました。また、エコロジーについての曲も書いています。地球が危機に瀕していることを人々に伝えたかったんです。

アルメニア移民の家族とともに

黒柳 お小さいときのことをうかがいたいんですが。子供の頃、お姉さまとのど自慢で賞金稼ぎをされたこともおありになるんですって？

アズナブール ええ。ピストロミたいなところで行われる余興でね。ステージで受けないと、引っ掛け棒で引きず

り下ろされるんです。当時は家計を支えるために、これでお金を稼ぎました。父が歌手で母が女優、姉も歌手でしたので、私は芸能一家に生まれたわけです。もし父が食料品店のおやじだったら、私も同じことをしていたでしょうし、銀行家だったら銀行家になっていたでしょう。

黒柳 いい銀行家になっていらしたのでしょうか。

アズナブール (強く)ノン。数字は苦手です(笑)。数字より言葉のほうが得意ですから。

黒柳 ご両親とお姉さまとの4人での暮らしは、どんなふうでいらっしゃいましたか。

アズナブール とても開放的な家でした。昼も夜も人が出入りしていたので、よくそれで目を覚ましたものです。一言で言えばボエームのような、気ままな暮らしをしていた家族だったんです。ご存知のように、私はオリエント(近東)の出身です。だから、中近東や北アフリカの人と一緒にいるとホッとしますね。私たちは強制や法律に縛られることなく、モラルに忠実に生きていますから。

黒柳 おじいさまがロシア最後の皇帝ニコライ2世の料理長でいらしたというの？

アズナブール 実際はニコライ2世ではなく、グルジア共和国トビリシの知事付き料理人でした。祖父はグルジア生まれのアルメニア人です。私はフランス生まれのフランス人ですが、アルメニアの魂を忘れません。

黒柳 第一次世界大戦中に、イスタンブールでアルメニア人の大虐殺があって、そのときに、お母さまはご両親とお姉さまとご兄弟をお亡くしになり、長い間その消息を探していらっしゃったそうですね。本当に大変な思いをなさったとか。

アズナブール たしかに、母の家族は虐殺されました。でも、家の中ではそのことには触れませんでした。よく質問されますが、あえて私たちはそのことは話しません。

私は移民の子です。生まれはパリですが、両親にしてみれば、私はもともとフランス人ではありません。祖国ではない国で、自分を確立して「フランス人」になるためには、大変なエネルギーを必要としました。

黒柳 だからこそアズナブールさんの歌は皆の心を打つのかもかもしれませんね。

本当に引退したらしたいこと

黒柳 ご自身のご家族についても少しお伺いしたいんですけど。

アズナブール ごく普通の家です。子供は4人。最初の結婚で1人、再婚して3人の子供を授かりました。孫は3人で、そのうちの1人がおととい結婚したばかりですから、ひいおじいちゃんになる日も近い(笑)。家族は、人種や宗教が様々なんです。私は、宗教や人種の違いを気にしません。大切なのは人間性ですから。家族にはまだアジアの人はいませんが、これから来てくれるかもしれませんね。

黒柳 おじいさまは料理人でいらしたそうですね。料理はなさいますか。

アズナブール 前はよくやったんですが。もし本当に引退するようなことがあれば、また始めたいですね。両親もとても料理上手でしたから、私も料理人予備軍です。

黒柳 今引退という言葉がちょっと出ましたが、引退についてお考えになることはあるのでしょうか。

アズナブール 歌をやめたいと思い、やめると歌いたくなる、この繰り返しです。一体どうしたらいいのか、いまだにわかりません。

黒柳 すごく健康そうにお見受けしますが、体のために何かしていらっしゃいますか。

アズナブール 全然！ 朝と昼は普通にとるんですが、夕食はほとんど食べません。イタリアン、和食、中華と、目先を変えていろんなものを食べるのが好きです。そうすると食欲がわいてきますね。

黒柳 来日されたら、見たいものは何かおありですか。

アズナブール アメリカもヨーロッパもそれぞれおもしろいのですが、日本へ行くとすべてが全く！違うので、何から何まで見て回りたくります。テクノロジーだけでなく、日本の文化には学ぶべきことが多いですね。私は日本に公演に行くという感覚がありません。個人的な楽しみのために行って、そこで歌ってみようといった感じです。日本は魅力的な国で、日本の文化についてまだまだ知りたいことがたくさんあります。今回は散歩したり、観光したりできる、余裕をもったスケジュールなんです。

黒柳 お相撲もお好きなのに、今回は時期でなくて残念ですね。

アズナブール 相撲はパリでは見たことがあって、相撲通の脚本家の友人にいろいろと教えてもらいました。能や歌舞伎も好きなんです。テレビでサムライの映画を見たり。言葉がわからなくても、アクションを見ているとなんとなくわかった気になりますね。

黒柳 日本の旅館にお泊りになった

ことは？ 小さいお庭がある旅館で浴衣を着て、木のお風呂に入って、畳にお布団を敷いて寝て、そこでご飯を召し上がるのはいいですよ。

アズナブール いいですね！ 実はまだ泊まったことがないんです。できれば何日か日本人のように生活してみたい。それも大都市ではなく、日本の良さが残る小さな街で。

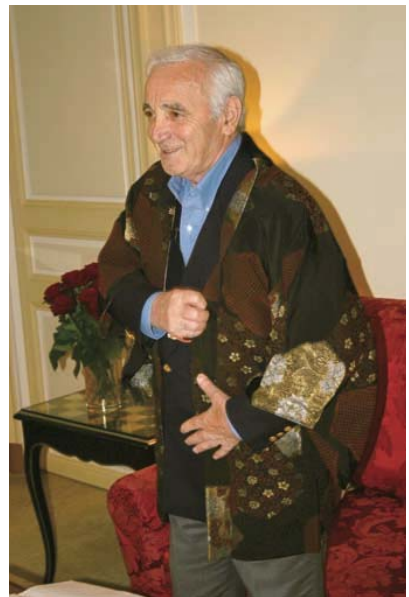
黒柳 今回、16年ぶりに日本にいらっしゃるの、日本のファンの方に一言メッセージを。

アズナブール いつものように、私は皆さんのご来場をお待ちしています。皆さんがすでにご存知で、いつまでも愛され続けるであろうシャンソンを歌います。もちろん、皆さんに初めてご紹介する作品も。皆さんにお会いできるのを心から楽しみにしています。

黒柳 舞台ではあれだけドラマチックに歌われる方が、こうしてお目にかかるスターっぽくなく、普通の人間であろうとしていらして、精神にぜい肉のついていないピュアな方という印象を受けました。今日のアズナブールさんと舞台のアズナブールさんとどのくらい違うか、公演が楽しみです。

アズナブール こちらこそ、『徹子の部屋』に出させていただいてありがとうございました。

番組からの贈り物で、100年ほど前の高価なうるしの羽織に袖を通すアズナブール氏



シャルル・アズナブールの歌は青春讃歌であり、
その歌声は愛の極致である。
決して美声とは言えないが、
音域ぎりぎりまで張りつめて歌う
ビブラートのかかったセクシーな声。
若さと自由を愛してやまない詩と曲。
私はいったい何曲、
アズナブールの歌を訳詩したことだろう。
「ラ・マンマ」「ラ・ボエーム」「恋は一日のように」
「思い出の瞳」「失われる心」「青春という宝」
「闘牛士」「人々の言うように」……
人を愛するとはどういうことなのか、
私はアズナブールの歌をひもときながら
学んだような気がする。
今までの来日公演は
むろんすべて聞きにいってるが、
ついに引退とは。
青春をありがとう！
涙とともに私はそう言いたい。

なかにし礼(作家)



ありがとう、さよなら



「シャンソンは三分間の芝居だ」
このことをまざまざと私に見せてくれ、
若かった私に、魂で演じるとは、
どういう事か教えてくれたのが、
アズナブールさんのステージでした。
一曲ごとに色々な人になり、嘆いたり、
笑わせたり、夢を語ったり、涙ぐませたり。
本当に、そこにそういう人が、いるようだったのです。
どう歌うかではなく、どう生きたか……。
今回のさよなら公演で、
私はしっかりと見たいです。

黒柳徹子(女優)



映画俳優としての シャルル・アズナブール

トリュフォーとゴダールと共に

Aznavour, l'acteur.

En Compagnie de Truffaut et Godard

山田宏一

ジャン＝リュック・ゴダール監督の『女は女である』(61)という映画のなかに、親友の妻のアンナ・カリーナに首ったけのジャン＝ポール・ベルモンドが昼下りのひと気のないパリの場末のカフェでデュボネを飲みながら絶望的に、むなしく、愛を告白するシーンがあり、そのときカフェのジュークボックスから流れていたシャルル・アズナブールの歌う「のらくらもの」が心にしみいる嘆き節のようにせつなく記憶に残っている。わたしはふざけたい／頭にのぼったアルコール／その酔いのいきおいで／勇気をだして言ってやる……

自嘲気味にせつせつと歌うアズナブール節である。

1993年2月、第4回ゆうばり国際冒険ファンタスティック映画祭に審査委員長として招かれて来日したシャルル・アズナブールにインタビューをするチャンスがあり、『女は女である』のなかであなたの歌う「のらくらもの」がカフェのジュークボックスから流れるシャンソンとして一曲まるまる使われていましたね、とたずねる

と、アズナブールは「そのとおりだ。それも無断でね。ゴダールのやつ、映画ができあがったあと、電話をかけてきて、きみのシャンソンが大好きで使わせてもらったんだけど、使用料がわからなくてね、とかなんとか言って、うまく値切ってね(笑)。しかし、さすがゴダールだ、うまく使ってる」と笑顔で答えたものだった。

『女は女である』のカフェのジュークボックスのなかには、アズナブールが俳優として出演したフランソワ・トリュフォー監督の『ピアニストを撃て』(60)のサントラ盤のカバーも飾られていて、ヌーヴェル・ヴァーグの仲間同士の親密感あふれる目くばせのようなたのしきだった。

ヌーヴェル・ヴァーグ——新しい波——とは1950年代末に斬新な映画づくりでフランスのみならず世界の映画史を変革することになる若い世代の総称で、トリュフォーとゴダールはその旗手的な存在だった。ヌーヴェル・ヴァーグの金字塔的名作になるゴダール監督の長編映画第1作『勝手にしやがれ』(59)も、そもそもはトリュフォーの原案によるもので、ジャン＝

ポール・ベルモンドが主役に決まる前はアズナブールの主演が予定されていた。そのことについて、アズナブールはこんなふうにした。「わたしを主役に考えたのはトリュフォーで、トリュフォーがわたしをゴダールに推薦したことも知っていたが、ゴダールの考えていた映画はまったくわたし向きではなかった。わたしは出演をことわって正しかったと思う。ジャン＝ポール・ベルモンドが主役を演じるようになって大成功だった。あのような攻撃的なキャラクターはジャン＝ポール・ベルモンドにこそびたりで、わたしには似合わない。『勝手にしやがれ』はジャン＝ポール・ベルモンドのキャリアの出発点になった——『ピアニストを撃て』がわたしの俳優としてのキャリアの出発点になったように」。

トリュフォー監督の『ピアニストを撃て』で主役のピアニスト、エドゥアール・サローヤンを演じて、アズナブールは「歌わない」スターになったのである。ゴダール監督の『女は女である』で、特別出演のジャンス・モローがピストルを

撃つまねをすると、アンナ・カリーナが「『ピアニストを撃て』のシャルル・アズナブールね！素敵だったわ！」と言う印象的なシーンがある。

「そのころ、シャルルはますます映画に忙殺されるようになり、シャンソンにあてていた時間の合間さえも映画にとられて、彼はとても忙しくなっていた。それらの映画とは『ピアニストを撃て』や『ラインの仮橋』である。これらの映画について、彼は『地獄の決死隊』に出演している」とシャルル・アズナブールの姉、アイダ・アズナブール＝ガルヴァレンツが『わが弟シャルル・アズナブールの想い出』（南部全司訳、審美社）のなかに書いているが、そのころ、1960年ごろ、フランス映画の話題作に次々重要な役で出演して、シャルル・アズナブールは「ヨーロッパのフランク・シナトラ」の異名を取り、『地上より永遠に』（'53）でアカデミー助演男優賞を受賞して『黄金の腕』（'55）に主演したフランク・シナトラのように歌手として出演するのではなく演技派の名優として評価された。とくに、本格的に主役を初めて演じた『ピアニストを撃て』は、「俳優」アズナブールの名声を決定的なものにし、代表作になった。アズナブールはすでに35歳で歌手としてのキャリアはあったが、じつは子供のころから俳優になりたかったのだという。姉のアイダといっしょに演劇学校にも通った。姉のほうが先に舞台で成功した。シャルルも舞台で子役をやりはじめたが（映画にも11歳のときにチョイ役で出演したことがあるとのことだが）、主役がとれないまま、15歳にもなると「もう子役もできず、食べていけなくなった」。そこで、「うまいぐあいにレビューで歌うチャンスをつかんだので、歌手になった」というのだ。「食うために芝居のほうはあきらめて、歌うほうに専念」し、小さいころから詩を書いていたので、作詞もやるようになった。「それから長いあいだ、ずっと歌手としてやってきた」ものの、心のなかではいつも「俳優になりたい」という思いが消えず、その間、チャンスがあれば映画に出ていた。1959年のジャン＝ピエール・モッキー監督の『今晚おひま？』に当時ブリジット・バルドーと結婚したばかりの美男俳優ジャック・シャリエと「女をひっかける」役で共演したあと、詩人ジャン・コクトーの映画『オルフェの遺言』（'60）にも特別出演している。フランソワ・トリュフォー監督が長篇映画第1作『大人は判ってくれない』（'59）のヒットで得た収益の一部を投資して共同プロデューサーになった作品である。アズナブールはこんなふうに語ってくれた。「あの映画にはジャン・コクトーの友人がみんな

出ているんだ。コクトーがみんなを招いた。本当に遺言のつもりで（実際、遺作になった）、最後の映画になることを自分でもわかっていたからなんだろうと思う。南フランスのレ・ポード・プロヴァンスで撮影していたが、わたしはちょうど全国ツアーの最中で、すぐまたパリに帰らなければならず、2時間だけ寄って、何かおそろしいものを見ておびえた顔つきをして、撮り終わるとみんなと別れの握手をして帰ってきただけ。あとで映画を見たら、主人公の詩人に扮したコクトーが背中から槍を突き刺されて倒れるところをわたしが見ておどろくというシーンだった。

アズナブールは、じつは、『ピアニストを撃て』の前に（1957年か'58年ごろ）、フランソワ・トリュフォー監督と、まったく別の企画でいっしょに仕事をするはずだったという。「トリュフォーはシャンソンが大好きで、パリのミュージックホールに通いつめ、わたしのステージについての長篇記録映画を企画していたが、それが劇映画の企画に変わってしまった。いい原作（デヴィッド・グーディスのミステリー小説）を見つけた、主人公がきみにぴったりの役だ、と言うんだ」。

『ピアニストを撃て』の主人公がシャルル・アズナブールにいか「ぴったりの役」だったかは、小柄で容貌もさえないうえに臆病で、好きな女をくどく勇氣もないのに不思議に女にもてる役なのだとさえ十分だろう。

内気で、気がよくて、目立たないが静かで誠実な人柄は、『今晚おひま？』でも、『ラインの仮橋』でも、そしてつい最近の『アララトの聖母』（'02）あたりまで、アズナブールが演じつづけてきたほとんどすべてのキャラクターに一貫したイメージだ。

『アララトの聖母』はアルメニア人の血をひくカナダ人、アトム・エゴヤン監督がトルコによるアルメニア人大虐殺の史実をたどるという物語で、パリのアルメニア人として（周知のように、シャルル・アズナブールはパリ生まれのアルメニア人である）映画のなかでこのアルメニア人大虐殺についての映画を撮ろうとしている良心的な社会派の映画監督の役を78歳のアズナブールが演じた。その役名がエドワード・サローヤンで（サローヤンは、もちろん、アルメニア系移民の子として生まれたアメリカの劇作家・小説家、ウィリアム・サローヤンの名前に由来する）、42年前にアズナブールが『ピアニストを撃て』で演じた役名、エドゥアル・サローヤンと同じである（エドゥアルはフランス語読み、エドワードは英語読みで、同じ名前だ）。

『ピアニストを撃て』は興行的にヒットはしなかったが、アズナブールにとって最も愛着のある映画だったというもうなげよう（唯一の真の主演作品でもあった）。

『ピアニストを撃て』は同時録音撮影ではなく、撮影現場では何の音も録音していなかった。クラシックを演奏するシーンは別だが、ジャズを弾くところはすべて即興で、バンドも「わたしといっしょに組んでいるベース奏者とドラマーに出てもらったんだよ。いつものようにいっしょに調子を合わせて、すべて即興でやったんだよ。映画の音楽を担当することになったジョルジュ・ドルリュエは、演奏するわたしたちの指の動きを見てメロディーをつけたんだ」とのこと。この映画からトリュフォー／ドルリュエの名コンビが生まれる。

アズナブールは「映画に出演するときは、音楽にかかわる気はまったくない。映画をやるときにはミュージシャンであることを忘れたいんだ。純粹に俳優として演じたいんだ。それでも、やむを得ず、10本ほど映画音楽を担当したことがあるが、小さきみに使われたりして、どうもわたしの性に合わないんだ」とも言った。

ピアノを弾くシーンだけでなく、『ピアニストを撃て』という映画全体が即興撮影の連続で、公開当時はあまりにも唐突で、奔放で、デタラメで、ばかばかしいと批判されたりもしたが、アズナブールは「それこそヌーヴェル・ヴァーグの特色だったんだ。思いがけないこと、びっくりすること、な、何だ、これは、というようなことの連続がヌーヴェル・ヴァーグだったんだよ。何が起るかわからないというおもしろさなんだよ」とも言った。「全篇ロケーションでね。ラストは真冬の雪の山小屋のシーンで、すごく寒かった。雪のなかでギャング同士で撃ち合うシーンの撮影が大変だった。俳優たちが次々に風邪を引いて、みんな、早く帰りたいって言い始めてね。それで、トリュフォーは、撃ち合いのシーンでは、風邪で早くパリに帰りたい者から先に殺してやろうって（笑）。デタラメといえばデタラメだけど、そんな即興が映画の魅力になっているんだ。わたし自身もその場の思いつきで、いろんなことをやったよ。たのしかったな」。

といった調子で、シャルル・アズナブールは俳優として演じることがどんなにたのしいのかを（実際、60本もの映画に出演しているのである）あの人なつこそうな笑顔でうれしそうに語ってくれたことが思い出される。気さくな人柄がとても印象的だった。

（映画評論家）



『ラインの仮橋』(’60)



『八月のパリ』(’66)



1936

La Guerre des gosses

(監督 ウージェーヌ・デスラウ、ジャック・ダロワ)

1938

Les Disparus de Saint-Agil

(監督 クリスチャン=ジャック)

1946

Adieu chérie

(監督 レイモン・ベルナル)

1952

Dans la vie tout s'arrange

(監督 ベルナル・フォルハウス、マルセル・クラヴェンス)

1957

Une Gosse sensass

(監督 ロベール・ピバル)

C'est arrivé à 36 chandelles

(監督 アンリ・ディアマン=ベルジェ)

Paris music-hall

(監督 スタニー・コルディエ)

1959

今晚おひま? / Les Dragueurs

(監督 ジャン=ピエール=モッキー)

La Tête contre les murs

(監督 ジョルジュ・フランジュ)

Gosse de Paris

(監督 マルセル・マルタン)

Pourquoi viens-tu si tard ?

(監督 アンリ・ドコワン)

Oh! Que mambo

(監督 ジョン=ベリー)

1960

オルフェの遺言 / Le Testament d'Orphée

(監督 ジャン=コクトー)

ピアニストを撃て / Tirez sur le pianiste

(監督 フランソワ=トリュフォー)

ラインの仮橋 / Le Passage du Rhin

(監督 アンドレ=カイヤット)

1961

地獄の決死隊 / Un Taxi pour Tobrouk

(監督 ドニ=ド=ラ=パテリエール)

Les Lions sont lâchés

(監督 アンリ=ヴェルヌイユ)

1962

Horace 62

(監督 アンドレ=ヴェルシニー)

ヒッチ=ガール / Les petits matins

(監督 ジャクリヌ=オードリー)

Les Quatre vérités, sketch : Les deux pigeons

(監督 ルネ=クレール)

フランス式十戒 /

Le diable et les dix commandements

(監督 ジュリアン=デュヴィヴィエ)

Pourquoi Paris

(監督 ドニ=ド=ラ=パテリエール)

1963

Les Vierges

(監督 ジャン=ピエール=モッキー)

Le Rat d'Amérique / ① アメリカのねずみ

(監督 ジャン=ガブリエル=アルビコ)

Tempo di Roma

(監督 ドニ=ド=ラ=パテリエール) (伊)

1964

アイドルを探せ / Cherchez l'idole

(監督 ミシェル=ボワロン)

Alta infedeltà, sketch : Peccato nel pomeriggio

(監督 エリオ=ベトリ) (伊)

1965

Thomas l'imposteur / ⑤ 山師トマ

(監督 ジョルジュ=フランジュ)

帰ってきたギャング /

La Métamorphose des cloportes

(監督 ピエール=グルニエ=ドフェール)

1966

八月のパリ / Paris au mois d'août

(監督 ピエール=グルニエ=ドフェール)

脱走部隊0013匹 /

Le Facteur s'en va-t-en guerre

(監督 クロード=ベルナル=オーペール)

1968

Caroline chérie

(監督 ドニ=ド=ラ=パテリエール)

1970

L'Amour

(監督 リシャール=バルドゥッチ)



『ブリキの太鼓』(’79)



『雨のエトランゼ』(’71)

キャンディ／Candy

(監督 クリスチャン・マルカン)(伊)

栄光への賭け／The Games

(監督 マイケル・ウィナー)(米)

狼の賭け／Le Temps des loups

(監督 セルジオ・ゴッピ)

冒険者／The Adventurers

(監督 ルイス・ギルバート)(米)

1971

雨のエトランゼ／Un Beau monstre

(監督 セルジオ・ゴッピ)

La Part des lions／㊠ ギャング無残

(監督 ジャン・ラリアガ)

1972

危険な来訪者／Les Intrus

(監督 セルジオ・ゴッピ)

1973

The Blockhouse

(監督 クライヴ・リーズ)(英)

1974

そして誰もいなくなった／

And then there were none

(監督 ピーター・コリンソン)(英)

1976

Folies bourgeoises／

㊡ ブルース・ダーンのザ・ツイスト

(監督 クロード・シャブロル)

スカイライダーズ／Sky Riders

(監督 ダグラス・ヒコックス)(米)

1979

Ciao, les mecs

(監督 セルジオ・ゴッピ)

ブリキの太鼓／Die Blechtrommel

(監督 フォルカー・シュレーンドルフ)(独)

Claude François - Le Film de sa vie

(監督 サミー・バヴェル)

1981

Der Zauberberg／㊢ 魔の山

(監督 ハンス・ヴィルヘルム・ガイセンデルファー)(独)

1982

Qu'est-ce qui fait courir David ?

(監督 エリ・シュエラキ)

Les Fantômes du chapelier

(監督 クロード・シャブロル)

1983

Une Jeunesse

(監督 モーシェ・ミズラヒ)

恋に生きた女ピアフ／Édith et Marcel

(監督 クロード・ルルーシュ)

1984

Viva la vie／㊣ ヴィバラビィ

(監督 クロード・ルルーシュ)

1986

Yiddish connection

(監督 ポール・ブージュナ)

1988

Mangeclous

(監督 モーシェ・ミズラヒ)

1989

Il Maestro

(監督 マリオン・ヘンゼル)(伊)

1992

Les Années campagne

(監督 フィリップ・ルリシュ)

1996

ボーマルシェ フィガロの誕生／

Beaumarchais l'insolent

(監督 エドゥアル・モリナロ)

1997

Pondichéry, dernier comptoir des Indes

(監督 ベルナル・ファヴル)

Le Comédien

(監督 クリスチャン・ド・シャロンジュ)

2002

Laguna

(監督 ドニ・ベリー)

1974, une partie de campagne

(監督 レイモン・ドバルドン)

アララトの聖母／Ararat

(監督 アトム・エゴヤン)(加)

The Truth about Charlie／㊤ シャレード

(監督 ジョナサン・デミ)(米)

2005

Emmenez-moi !

(監督 エドモン・ベンシモン)

Ennemis publics

(監督 カリム・アブウ、カデル・アイド)

2006

Mon colonel

(監督 ローラン・エルビエ)

注*劇場公開された長編作品。年度は仏国立映画庁(CNC)の公開年度。邦題は日本公開作品(TV、ビデオ、DVD含む)のみ。*表記は、(米)アメリカ映画、(英)イギリス映画、(伊)イタリア映画、(独)ドイツ映画、(加)カナダ映画とし、その他(印のないもの)はすべてフランス映画。TVは㊠、ビデオは㊡、DVDは㊢とした。

表紙裏「オルフェの遺言」(’60) 裏表紙裏「ピアニストを撃て」(’60)

アズナブールまたは、節度あるアヴァンギャルド



Charles Aznavour ou "l'avant-garde modérée"

大野修平

ラルース社から刊行されている『シャンソン事典』（1999年）のシャルル・アズナブールに関する記述は6ページに及ぶ。その末尾に興味深い表現がある。アズナブール自身の言葉として紹介されているものだ。「私は節度あるアヴァンギャルドに属している」。

“節度あるアヴァンギャルド”とは何だろう。事典のこの項目を執筆したヤン・プウルガステルはこう解く。「斬新奇抜さと穏やかな確信のカクテル」。

そのどちらか一方だけではない。両者がほどよくミックスされているところに作詞家として、また歌手としてのアズナブールの魅力があるというわけだ。

イヴ・モンタンに拒否されて

アズナブールはソロ歌手として名を成す前、エディット・ピアフ、パタシュウ、ジュリエッ

ト・グレコ、エディ・コンスタンティース、フィリップ・クレイといった歌手たちに作品を数多く提供してきた。しかし、彼が書いた斬新奇抜なアイデアに基づくシャンソンは時に拒否されることもあった。

たとえば彼のキャリア初期の作品「酔いしれて」（45）。アズナブールの自伝『前の時代』（フラマリオン社刊、2003年）に、この曲にまつわるエピソードが載っている。この時期、彼はピアニストで作曲家のピエール・ロッシュとデュエット・グループ、ロッシュとアズナブールを組んでいた。

「酔いしれて」の主人公は恋人に振られたことに傷ついてコニャックやウイスキー、ジンなどを飲み、酔った男。彼は自分を振った“きみ”を忘れるために、二日酔いになるまで飲み続けるのだ。そんなストーリーの歌詞にロッシュが曲をつけた。

誰に歌ってもらおうかと相談したところ、

「イヴ・モンタンがいい」ということになった。ロッシュ、アズナブールともにモンタンを尊敬していたからだ。

また45年、モンタンはパリのエトワール劇場に初出演してスターの仲間入りをしたところだった。出来上がったばかりのシャンソンを彼に歌ってもらえればヒット間違いなし、とも若きアズナブールは想像したことだろう。二人はモンタンの楽屋に行き、「酔いしれて」を聴かせる。

モンタンもエディット・ピアフに才能を見出され、引き立てられた歌手で、この頃まだピアフの影響下にあった。注意深く二人のデモンストレーションを聴き終わったモンタンは答えた。「酔っ払った主人公が最後に自殺して終わるならこのシャンソンを歌おう」。悲劇的な結末ならピアフの好みにも合う、とモンタンは判断したようだ。

次に拒否したのはアズナブールの方だった。「もし酔っ払った男たちがみな自殺していたら、フランスの人口の3分の1が失われてしまうことでしょう」。

「酔いしれて」はモンタンによって歌われることはなく、コペンハーゲン生まれの歌手、ジョルジュ・ユルメールの手に渡る。ユルメールはこれを46年にレコーディングし、アカデミー・シャルル・クロディスク大賞を獲得した。

酔った男のモノローグといった、あまり褒められたテーマではないシャンソンの歌詞にアズナブールはいささかの変更も加えることはなかった。穏やかな確信があったのだろう。実際、ヒット曲となってその確信は証明されたのだ。

イヴ・モンタンがアズナブールの作品を歌うのを拒否したのはこの時ばかりではない。「希望に満ちて」（60）も同じ目に遭った、と『前の時代』に出ている。

このシャンソンでは、30年間歌い続けても大きな成功を手に出ない歌手が主人公。いつかは劇場に貼られるポスターのトップに名前が出るスターになるんだ、との決意も固く“僕”は18歳で故郷を出る。最新流行のスーツを誂え、オーケストラ用の楽譜も用意する。

“僕”はみじめなギャラとか、安っぽい食事に耐えながら恋の歌、コミックな歌など何でも、どこでも歌った。が、いっこうに芽が出ない。「僕」をまるで理解しない観客がいけないんだ」とぶちまける。

アズナブールはイヴ・モンタンにこのシャンソンを差し出す。女優で、モンタンの妻でもあるシモーヌ・シニョレもその場にはいた。モンタンは断った。歌手の仕事テーマにしたシャンソンが観客の興味を惹くことはない、というのが理由だった。数年後、シニョレはアズナブールに自分たちが間違っていたことを認めたという。

禁じられたテーマへの挑戦

アズナブールはさらに大胆なテーマを選んでゆく。

1956年に発表された「愛のあとで」。愛の行為を終えたばかりの男と女がベッドに横たわったまま、快楽の余韻に身も心も委ねている様子を歌詞に書いた。

しかしその当時、ベッドのなかのことは歌わないというのが暗黙の了解だった。アズナブールの行動は世間の目には掟破りと映った。「枕にはりつけの刑にされた歌手」という酷評をする批評家もいたほどだった。ラジオでの放送は見合わされた。

が、どんなに叩かれてもアズナブールはこのシャンソンを手放そうとはせず、歌い続けてきた。愛し合う男女ならば誰もが同じ欲びを体験しているのだから、隠す必要などあるだろうか。

先に挙げた『シャンソン事典』のアズナブールの項に、先輩歌手モーリス・シュヴァリエの言葉が引用されている。「彼はあえて、愛というものを人が感じているように、実践しているように、苦しんでいるように歌ったのだ」。そう、アズナブールはこの後も怯むことなく官能的な愛を歌う。「じっとこうして」(64)がいい例だ。

アズナブールは71年、高校生と恋愛関係に落ちた女性教師ガブリエル・リュシエ事件を題材にした「炎の恋」を書き、歌った。アンドレ・カイヤット監督映画「愛のために死す」の主題歌だ。これも世間の目から見れば、決して好ましいテーマではないかもしれない。しかしながら、当人たちにとって真摯な愛だとしたら他人があれこれ言えるだろうか。

73年には「人々の言うように」を発表。ホモセクシュアルの男性を主人公に据えた。まだ同性愛者への偏見が強い時代のこと、このシャンソンも物議をかもした。主人公の“私”は女装のダンサー。思いを寄せる“彼”は女にしか興味がない。でも、愛することをやめられない。「誰にも咎められるいわれのない、そんな“私”の生き方が歌われる。

時代に先駆けた、禁じられたテーマに果敢に取り組むアズナブールの姿はやはり、アヴァンギャルドの名に値する。

演出面の斬新さ

アズナブールは作詞面ばかりではなく、ステージで歌う際の演出面でも斬新さを打ち出している。

特筆すべきは先述の「希望に満ちて」だろう。レヴューリック広場にほど近いマルト通り50番地にあったミュージックホール(アランブラ)で60年12月9日からアズナブールのリサイタルが始まる。このシャンソンを歌う際に彼は画期的な演出を見せた。

スターになることを夢見ながら、売れないまま30年間歌い続けてきた歌手を演じて歌うアズナブール。シャンソンの終わりの箇所、アズナブールはジャケットを着直し、ネクタイの結び目を整える。と、会場内のライトが消え、同時にステージ奥の床上に並べられた多数のスポットライトが点灯し、客席を照らす。アズナブールは実際の観客に背を向け、ステージ奥に向かって踊りながら歩いて行く。そちらに仮想のステージと客席がある、という想定なのだ。実際の観客は、ステージに出て行く歌手を背後から見る格好になるわけだ。彼の後ろで幕が下りる……。

満を持した演出だった。が、観客たちは当惑したようだ。アズナブール自身の言葉を借りよう。「そこで拍手が来るのを期待していたのだが、たいへんな沈黙があった。私はステージ下手にいたジャン＝ルイ・マルケ[注:当時のマネージャー]の元へ戻って告げた。『明日から仕事を交えようぜ』」(同書)。

マルケに促され、アズナブールは挨拶をするために再びステージに姿を現す。席を立つ音が聞こえる。観客は帰ろうとしているのか。違う。スタンディング・オベーションの始まりだった。割れんばかりの拍手喝采。彼の演出は受け入れられたのだった。

他にも優れた演出はある。たとえば「昔気質の恋」(72)。若者向けの騒々しい音楽で満ちたディスコテークで、スロー・ナンバーの時に頬と頬を寄せ合いながら踊る熟年のカップルをアズナブールは独演する。「さあ、人込みのなかへおいで、でも騒音からは切り離されて／この地上にきみと僕しかいないかのように」。

マイクを抱くようにして歌いながら、アズナブールは反対の手を自分の首の後ろから肩にかけて回す。背後からはちょうど女性の手が彼の肩を抱いているみたいに見える。間奏の時には、優しい台詞で相手に語りかける。大人のダンスタイムを素敵に描き出すことに成功している演出だ。

「ラ・ボエーム」(65)でのハンカチの使い方も印象的。ある時はそれは、画家を志す青年が恋人と住むアパルトマンの窓辺に咲くリラの花となる。また、続く歌詞では絵筆を拭く布に変じる。そして、ついにやって来なかった画家としての栄光とともに散り果てたリラの花としてステージに投げ捨てられる。アズナブールは1枚のハンカチにまるで命を通わせるかのように操る。しかも、観ている側に説明臭い感じを一切与えない。幼い頃から培った演技力の確かさも、そこにはある。

「声のない恋」(80)では手話を導入した。言葉の不自由な恋人に語りかけるシーンを演じるためだ。これも新しい演出だった。ダニエル・リカーリのコーラスも美しい。

7分を超えるシャンソン

アズナブールには演奏時間が7分を超えるシャンソンがある。「遠い思い出」(71)と「自叙伝」(80)。

「遠い思い出」では、“僕”は昔の恋人と偶然に夜のパリで再会する。“僕”は懐かしさも手伝って“きみ”をカフェに誘う。話題は自然と過去に遡る。二人は父親に別れさせられたのだった。父親の目には“僕”は娘の結婚相手には物足りなかったのだ。

失われた二人の間を埋めるには時間がかかる。おそらく1時間くらいでは足りまい。きっと、“僕”は楽しかった日々断片をひとつずつ語ることだろう。それを聴きながら心を動かされた“きみ”も、記憶の引き出しからそれらを取り出してゆく。アズナブールはそうした心の動きを映し出そうとした。だから、このシャンソンの時間も長くなった。

「自叙伝」。2006年11月3日に他界した、オーケストラ指揮者・作曲家、編曲家のポール・モーリアが久しぶりにアレンジと指揮を担当した同題のアルバムにこのシャンソンは収められている。二人は1951年以来のつき合いだ。「ポール・モーリアが指揮棒を振るの、レイモン・ルフェールが音響操作をするのが自分には最適だった」と、アズナブールは僕とのインタビューでも語っていた。9歳でステージにデビューしたアズナブールのキャリアを語るとなれば、7分以上かかるとしても何の不思議もない。

アズナブールは勇気がある。ラジオでオンエアされるためには、3分以内の楽曲にした方が有利なはずだ。それをあえて、倍以上の時間がかかる長い曲にしているのだから。

ここにも作詞家として、歌手として譲れない挑戦があり、穏やかな確信が貫かれていると考えられる。

AとZ

アズナブールの名前にはAとZという、アルファベットの始めと終わりにある対立した文字が入っている。

アズナブールは興味深いことを書いている。「私の標語は異なった党派の男女に共感を覚えること。私の党派は観客だ。白人、黒人または黄色人種、右または左、金持ちまたは貧乏人、異性愛者または同性愛者」(同書)。

彼のシャンソンにも異なった要素がある。ひとつは人間性の肯定に向かい、もうひとつは「アヴェ・マリア」(78)などに見られるように神へと向かう。その信仰心が「節度」の源だ。

シャルル・アズナブールはいまもシャンソンを書き続けている。AとZの間を行き来しながら。(シャンソン評論家)

略年譜 アズナブールは旅する

Biographie "Aznavour voyage"

監修 大野修平

1924年 誕生

5月22日パリに生まれる。父はオペラ歌手、母は女優。

アルメニア人の両親は非トルコ系民族への迫害を逃れてニューヨークへ向かう途中だったが、シャルル出産のため、パリでレストランを開くことになる。

1930年代 子役時代

レストランは大不況のため閉店。シャルルは9歳でオーディションを受け、児童劇やシェイクスピア劇に出演。13歳のとき、姉に続いてミュージックホール系の劇団に入り、コメディやショーを演じながら各地を巡る。当時の流行歌手モーリス・シュヴァリエやシャルル・トレネの歌を歌う。

1940年代 デュオ歌手としてデビュー

第二次世界大戦が勃発し、父はフランス軍に従軍。仕事はなく、新聞の売り子などをして家計を支える。17歳のとき、クラブ・ド・ラ・シャンソンで作曲家のピエール・ロッシュと知り合う。教会でのショーで偶然コンビとして紹介された二人はデュエットで歌い、以後コンビを組んで('42~'50)、人気者となる。また、ロッシュの曲に作詞もするようになる。

46年 アズナブール作詞・ロッシュ作曲による「酔いしれて」をジョルジュ・ユルメールがコロムビアでレコーディング。同年、ミシュリースと結婚。翌年長女セダが誕生。

47年 「酔いしれて」が戦後初のレコード大賞を獲得。二人の初のヒット曲となる。

48年 「酔いしれて」をアズナブール自身がリドルでレコーディング。

この頃、音楽出版社を経営するラウル・ブルトンに才能を認められ、作詞の依頼を受けるようになる。また40年代末から8年間、他の若い音楽家たちと共にピアフ宅に住み、アメリカ公演にも参加。

1950年代 シャンソン作詞者から歌手へ

ピアフは一人で歌うことをアズナブールにすすめたが、声とスタイルのせいか歌手としてはなかなか認められない。この頃の作詞に「若者がいた」('50・ピアフ)、「殺された溺死人」('52・フィリップ・クレイ)、「あくびして眠る」('53・エディ・コンスタンティニス)、「メケ・メケ」('54・ジルベール・ベコー)などがある。「日曜日は嫌い」('51)は、当初ピアフに持ち込まれたものの彼女がことわり、グレコが歌った。

51年 「日曜日は嫌い」がSACEM賞(仏音楽著作権協会賞)を受賞。

54~55年 ムーラン・ルージュ、オランピア劇場で公演。

56年 「愛のあとで」が物議をかます。自動車事故にあうが一命をとりとめ、舞台に復帰。

57年 トレネがアズナブールの3枚目のレコード(25cm盤)に「詩と音楽性を備え、ジャズのスタイルで歌うことのできるフランス唯一のアーティスト」と書く。

この頃から『今晚おひま?』『オルフェの遺言』『ピアニストを撃て』などの映画に積極的に出演。アルメニア人の作曲家ジョルジュ・ガルヴァレンツ(後に姉のアイダと結婚)と知り合う。

1960年代 フランスから世界へ

世界的な歌手へと飛躍し、ヒット・ナンバーを次々と発表する。義兄ガルヴァレンツの作曲・編曲を得て生まれた名曲も多く、若手の歌手ジョニー・アリディに「夜をかえして」('62)、シルヴィ・ヴァルタンに「アイドルを探せ」('63)などを提供。また『帰ってきたギャング』『八月のパリ』にも出演するなど映画への情熱も衰えない。

60年 バークレー・レーベルに移籍。ポール・モーリアの演奏で「希望に満ちて」を斬新な演出で歌い、大成功を収める。

63年 初のアメリカ公演。ニューヨークのカーネギーホールを満員にする。

64~65年 東欧、ロシア、カナダ、南米などで公演。

65年 オランピア劇場で3ヵ月にわたるワンマンショー。同年、オペレッタ『ムッシュ・カルナヴァール』(シャトレ座)の全曲を作曲。劇中の「ラ・ボエーム」が世界的に大ヒット。

66年 初めて日本を訪問。

67年 スウェーデン女性ウツラ・トルセルと熱烈な恋愛結婚。

68年 初の来日公演。東京、大阪、名古屋で公演。

1970年代 成熟と充実

暴力や同性愛など、様々な社会問題にも目を向け、積極的にそれらをテーマに作詞していく。またレイ・チャールズ(「ラ・マンマ」)、フレッド・アステア(「昔気質の恋」)、ビング・クロスビー(「帰る来ぬ青春」)などアメリカの偉大な歌手たちにも楽曲を提供。

71年 映画『愛のために死す』のために作詞・作曲した「炎の恋」を自ら歌う。

74年 「忘れじの面影 シー」で、フランス人としては初めて、イギリスの「ゴールド・ディスク賞」「プラチナ・ディスク賞」が授与される。

75年 アルメニア人虐殺60周年記念日に、「あの人たちは殺められた」(邦題「去りし人々」、ガルヴァレンツ作曲)発表。

エリザベス女王の「ロイヤル・パフォーマンス」のスターに選ばれ、恒例となった海外ツアーでは、毎年圧倒的な成功を収める。

1980年代 心機一転

80年 アルバム『自叙伝』に国際障害者年になむ「声のない恋」を収録。反響を呼ぶ。

83年 バークレー・レーベルからトレマに移籍。84年頃から、ツアーを行いながらスイス、アメリカと住まいを転々とする。

87年 パレ・デ・コングレで約40日間にわたるリサイタル。以後、ライブ会場はオランピアからパレ・デ・コングレに移る。

88年 アルメニア大地震が発生、5万人の死者を出す。「アルメニアのためのアズナブール基金」を設立、被害者救済のため精力的に活動。

89年 「アルメニア、汝がために」のレコーディングを呼びかけ、89名のアーティストが参加。同アルバムは100万枚の売り上げとなる。

1990年代から現在 「私は引退しない」

97年 レジオン・ドヌール勲章のオフィシエ章を授与される。

98年 ダイアン・リーヴスらと共演し、ジャズのスタンダード・ナンバーを取めた『ジャズナブール』リリース。

00年 全曲作詞・作曲のミュージカル『ロートレック』公演(ロンドン、シャフツベリー劇場)。アルバム『Aznavour 2000』(日本未発売)をリリース。

02年 映画『アララトの聖母』公開。

03年 アルバム『Je voyage』(日本未発売)をリリース。

04年 パレ・デ・コングレでのロングリサイタルの千秋楽に80歳の誕生日を迎える。

05年 アルバム『Insolitement vôtre』(日本未発売)リリース。

06年 “Tournée des Adieux ありがとう、さよなら公演”をニューヨークからスタート。

07年 最後の来日公演。

これまでに約1000曲にのぼる歌を作詞、作曲し、世界的な歌手として活躍し、60本余りの映画に出演してきたシャルル・アズナブール。87年のシャンソン「私は引退しない」で宣言したとおり、彼の旅はまだ終わっていない。

参考資料:

『アズナブール——ハートのキング』(アニー・レヴァル/ベルナル・レヴァル著 南部全司/山崎俊明訳 審美社)

『わが弟シャルル・アズナブールの想い出』(アイダ・アズナブール著 南部全司訳 審美社)

『Le temps des avants』(Charles Aznavour / Éditions Flammarion)



すべてに終わりが来ると分かっていても
できるだけ丁寧に物事にとりくみ
命には限りあることが分かってはいても
一日一日を精一杯生き
短い夜の間に見るささやかな夢を
いつも分かち合おうとするなら
僕たちはいつだって二十歳のままだ

Tant que nous prendrons le temps
sachant que tout s'achève
tant que nous prendrons le temps
de vivre avant de mourir
en mettant à tout instant
durant nos nuits brèves
en commun nos moindres rêves
nous aurons toujours vingt ans.

心を揺さぶる本に出会うと
僕は物語の主人公になり
歌の詞を書く
僕はありったけの心をこめて
歌をつくるんだ
でもその歌も
いつかは忘れられてしまうのか
それともみんなに愛されて
僕が死んでも
永遠に残るなら
最高に嬉しい
僕は言葉をあやつり
歌詞をつづる
その歌は
ダイナミックな力にみちあふれ
聴く人に生きるパワーを吹き込む
歌は人々を明日の希望へとつなぐ
僕は言葉が大好きだ

Je lis, je ressens, je m'identifie,
je travaille, j'enfante, le texte
naît, il meurt ou il grandit, me
survivra-t-il, peut-être mais qui peut
prédire, j'ai la passion des mots, je hais
l'écriture, dans une chanson chaque
phrase se doit, de produire sa propre
énergie, je n'aime pas les images
gratuites, j'ai horreur du remplissage
de l'inutile, j'ai la passion des mots.

(訳・田村恵子)



